

君に**挑戦**！ これなんだ？？

第5回

さいたま戦国のおわり編

番外編

天下人・秀吉がやってきた

とよとみひでよし てんかとういつ
1590年（天正18年）は、豊臣秀吉が天下統一を完成させた年として知られているね。この1590年の天下統一は、何段階かに分けて実行されたんだけど、その最大の山場は、関東の統一をすすめていた北条氏（本拠は小田原城。神奈川県小田原市）をほろぼしたことだね。でも、天下統一の完成は、小田原からうつのみや宇都宮（栃木県宇都宮市）、そしてあいづ会津（福島県会津若松市）に移動して達成されたんだ。そして、この移動の途中とちゅうとその帰り道、秀吉はさいたま市にやってきたんだよ！。

秀吉がさいたまにやってきた（行き）

秀吉は、小田原城が落城するより前の7月3日、小田原から会津まで道路を整備しよう、命令を出したんだ。そこでは、道のはばから橋のかけ方、秀吉が泊まる「ござしよ御座所」整備の分担の仕方などまで、こと細かに指示をしているんだよ。ついで、小田原城落城後の7月6日に出した命令書では、7月14日か15日には「岩付」まで進軍する予定

いわつき いわつきじょう
だって言っているんだ。「岩付」は岩槻城（岩槻区）のこと。秀吉は、岩槻をとおって宇都宮方面に進む予定だったってということがわかるね。

秀吉が実際に小田原を出発したのは、予定より遅れた7月17日。鎌倉（神奈川県鎌倉市）に立ち寄ってから、江戸（東京都千代田区など）に行ったんだ。7月20日に江戸を出発してその日の晩は岩槻城に泊まり、翌日、岩槻城から古河城（茨城県古河市）に向かったようだよ。

このとき秀吉が進んだ道がどこなのかは、くわしい記録がないのでよくわからないんだけど、江戸時代に「日光御成道」って呼ばれるようになる街道（もしくはその前身の道）を通った可能性が高いんだよ。

のちの「日光御成道」を通ったと考える理由

※先をいそぐ人は、ここは飛ばして読んでください

まず、秀吉が江戸、岩槻、古河などに泊まるのは、天下人にふさわしい宿泊場所は、各地の中心となる城だったからってということ、警備をするには城が確実だということ、それと大軍を収容できる場所は城だからってということ、こういう理由なんだけど、そうした城と城の間は、戦国時代の間はかなり道路の整備が進んでいたようなんだよ。

次に、このころ、徳川家康の家来に松平家忠っていう武將がいたんだけど、この人は、なんと日記を残していて、そこには忍城（行田市）と江戸の間を往復したことも記されているんだ。松平家忠は、家康から忍城を預ける、という命令を受けて、忍城の城代をつとめていたんだ。忍と江戸の間は、ふつうの時は1泊2日の行程で、1590年と1591年の最初のころには、「岩付近所」や「大門」、「野田」、に泊まっているんだけど、その後は浦和（浦和区）に泊まるようになるんだ。「岩付近所」というのがどのあたりかは正確にはわからないんだけど、野田と大門はどちらもさいたま市緑区の地名で、のちの日光御成道にそった地区なんだよ。大門（緑区大字大門）はやがて「大門宿」っていう宿場として整備されるし、野田は大門の北側にある地区だね（緑区大字上野田ほか）。

これらのことから、1590年当時、江戸から北にむかう道の中で、主要な道は、のちに「日光御成道」として整備される道すじだった、って考えられるんだ。

そうすると、秀吉は、江戸城を出発したあと、荒川（このころは「入間川」^{いるまがわ}っていう川だったんだよ）を渡って現在の埼玉県に入り、川口市を通りぬけて、緑区大字大門でさいたま市に入ったんだね。大門の先は、細長い高台（大宮台地）の真ん中を通る道を通して、^{なんぶりょうつじ だいやま かみのだ}南部領辻、代山、上野田へと進んで、今度は見沼区に入るんだ。見沼区では、^{ひざこ ひがしみやした みやがやとう}膝子、東宮下、宮ヶ谷塔と進んだら、^{あやせがわ}低地に下り綾瀬川を渡って岩槻区に入る。岩槻区^{かくら}加倉からまた高台に上がると、^{おおがまえ}岩槻城大構が見えてきて、そこに開いた門をとおりぬけると、岩槻城下町だね。城下町をつらぬく道のその先が岩槻城だよ。

岩槻城内には、秀吉のための「御座所」^{ござしょ}がしつらえてあって、^{とも じゅうしん うたげ}お供の重臣たちと宴を開いたりしたかもしれないね。翌朝、秀吉は岩槻城を出立し、大構の門を出るとまもなく元荒川（このころは荒川だったんだ）。これを渡って南辻、表慈恩寺、上野、古ヶ場、^{もとあらかわ}相野原、^{みなみつし おもてじおんじ うえの こかば}鹿室を進むと、さいたま市から白岡市に入るんだ。
^{あいのほら かなむる}



— 江戸時代の日光御成道
— 秀吉の帰り道のイメージ

またまた

秀吉がさいたまにやってきた（帰り）

秀吉は、古河^{こが}、結城^{ゆうき}（茨城県結城市）を経て7月26日に宇都宮に到着し、なんと8月4日まで9日間も宇都宮にいたんだ。秀吉は、北関東や東北地方の大名たちを宇都宮に集め、天下統一仕上げの基本方針を示したんだよ。はるばる宇都宮まで出向いたのに、秀吉の許しを得られずに、領地を取り上げられた大名もたくさんいるなど、秀吉の方針はとて^{きび}も厳しいものだったんだ。

そしてその最中の7月28日、秀吉は、次のような命令をだしたんだ。

岩付から小田原の間の道筋に私が使う御座所の整備を、忍^{おし}・河越^{かわごえ}・岩付^{いわつき}の三城^{さんじょう}の警備に当たっている番衆に指示して実施しなさい。御座所の建物は、河越城の建物を解体してその材料で造りなさい。

天正 18 年 7 月 28 日「豊臣秀吉朱印状」（大阪城天守閣所蔵）
『豊臣秀吉文書集』No.3331

ここでは、秀吉が会津まで行ったあとの帰り道の準備を進めるように命令しているんだ。忍城や岩槻城は北条方と豊臣方との間で激しい戦いがあったけど、河越（川越）城は戦わずに降伏したから、建物が無傷だったんだね。だから、その建物を解体して、秀吉が泊まったり休息したりするための「御座所」の建物を造りなさい、っていうんだね。行きには、鎌倉や江戸を通ったから、その道筋ではすでに「御座所」は整備されていたよね。だから、帰り道では、江戸にはよらない道をとおることにしたことがわかるんだ。おそらく武蔵府中^{むさしふちゅう}（東京都府中市）を經由して、内陸を小田原へと向かう道をとおることにしたんだ。岩槻城やその北の城々は、行きに秀吉がとまっているから、御座所はすでに用意されていたから、岩槻から先の新しいルートのところで準備をしなさい、っていうことなんだね。帰り道には岩槻城に泊まることはもうきまっていたんだね。

その後秀吉は、8月4日に宇都宮を出発して、白河^{しらかわ}（福島県白河市）から東北地方に入り、8月7日には長沼城^{ながぬまじょう}（福島県須賀川市）にとまったんだ。そこに井伊直政^{いい なおまさ}からの手紙が届いたんだ。井伊直政は、徳川家康の重臣中の重臣。秀吉はさっそく返事の手紙

を書いたんだけど、そこにはこんなことが書かれていたんだ。

みのわじょう

あなたからの手紙を今日、長沼で読みました。箕輪城を居城とすることになったとのこと、家臣たちへの領地の配分をしっかりと行い、城の改修もきちんと行うようになさるとよいでしょう。私のところに今わざわざ出向く必要はないですよ。もうすぐ会津に到着するけど、長居はしないので、私の帰り道で、岩付にでもよいし、その近くの宿泊場所でもよいので、あなたの都合のいい場所に顔を見せに来てくれればいいですよ。

天正 18 年 8 月 7 日「豊臣秀吉書状」(「井伊家文書」)
『豊臣秀吉文書集』No.3374

北条氏がほろんだあとを受け継いだ家康は、8月1日に新たな本拠地の江戸城に入城して、重臣たちにも関東各地の城を与えたんだ。井伊直政は北関東の要・箕輪城(群馬県高崎市)で12万石を与えられたんだ。直政が箕輪城を与えられたのは秀吉から家康への助言があったから、っていう話もあるくらい、直政は秀吉からも重んじられていたんだ。だから、きっと直政は箕輪城に入城した報告をした上で、会津に向かう秀吉の陣にあいさつに参上したい、と手紙で伝えたんだと思うよ。そうしたら秀吉は、わざわざ会津まで来なくていいから、帰り道で会おうよ、って返事したんだね。さっきの7月28日の命令と同じように、会津からの帰り道にも、岩槻城に泊まることを予



定していたことがわかるね。

さて、秀吉は会津には4日間ただけで帰途についたんだ。帰り道は、白河を通る道ではなく、^{たじま}田島を通る道を通して、8月14日に宇都宮までもどったんだ。田島ってい^{みなみあいづ}うのは、福島県南会津郡南会津町の地区だよ。あれ？南会津町って、どこかで聞いたことがあるような……。そうだ、さいたま市^{たていわ}の館岩少年自然の家があるまちだ！
地図で見ると、秀吉がとおった道からはちょっとはなれているけど、すこし親しみを感^{たていわ}じるねえ。おっと、寄り道はこれくらいにして、帰り道、秀吉は宇都宮では一泊しただけで、8月15日は古河、そして8月16日に岩槻城に泊まったんだ。このときのようすは、次のような記録がのこっているんだ。

さるほとに、御かいちんのとき、むさしのいわつきにて、なにしおふ
はきを御一らんありて、

くわんはくひてよしこう、とうざをあそはしける。

なこりをは つきるえたにや のこすらん

はなのさかりを すつるみやこち

とはんへりさふらひし。御いそきなさるゝほとに、

天正十八年かのへとら九月一日

せいとじゆらくにいたつて御きらく。ちんちようちんちよう。

『大かうさまくんきのうち』（太田牛一自筆本）

慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション (Keio D Collections)

え？ これ、どこのことば？ だって？ う～ん、このころは平仮名の使い方も今とは違うし、そもそも文章のきまりごとや言葉づかいも違うからね。たしかに外国語みたいだね。でも、見方を変えると、過去の世界を知るっていうことは、ちがう文化にふれるっていうことかもしれないなあ……。こういうのをグローバルっていうのかな？

え？ そんなことはいいから、なんて書いてあるのか、早く説明してよ！、だって？
は、はい、はい。えーと、ここにどんなことが書いてあるのかを、大まかにいいかえる

と、こんなふうになるよ。

がいせん はぎ かんぱく
さて、凱旋の途中、武蔵の岩槻で、名高い萩をご覧になって、関白秀
吉公は、その場で歌をよまれました。

なごりをば つきる枝にや 残すらん
さか す みやこち
花の盛りを 捨つる都路

(この見事に咲き乱れる萩と同じように、関東・東北を平定した

この長旅の名残を残して、都へと帰っていくんだなあ)

秀吉公は帰路をお急ぎになられたので、天正18年庚寅の9月1日、
かのえとら
じゅらくてい ふじ きらく
京都の聚楽第に到着し、無事帰洛なされたのです。めでたしめでたし。

ほこ はぎ わか よ
秀吉は、岩槻城で咲き誇る萩を見て、和歌を詠んだんだね。萩は秋の花として親しま
れていたので、春先に都を出て、秋に凱旋することの感慨も込められていたのかもしれ
ないね。

こうりききよなが
このエピソードは、あらたに岩槻城主となった、徳川家康の家臣・高力清長という人
の記録にも、こんなふうに記されているんだ。

秀吉公が岩槻城におこしになったとき、清長は、秀吉公をもてなしま
した。秀吉公は庭の萩の花をご覧になって、やまとうたをよまれ、清
長にくださいました。

『高力系図』（国立公文書館内閣文庫）

『岩槻市史近世史料編Ⅲ 藩政史料（上）』

さて、ここで問題になるのが、岩槻城のあと、秀吉はどこをとったのか、っていう
こと。さっき7月28日の秀吉の命令を紹介したときに、帰り道は、岩槻から武蔵府中
（東京都府中市）をとる道だった、って説明したね。府中には、このときの秀吉の「御
座所」設置をもとにして、軍勢が駐留できる施設が整備されたようなんだ（その後、家

康が鷹狩の時に使う「府中御殿」となったようだよ)。府中と岩槻城のきよりは、だいたい40km。このころの軍勢の移動は、1日40kmが標準だったようだから、ちょうどよい位置関係だね。

では、岩槻城から府中へ行く道はどこをとったのかな。それをはっきりと教えてくれる史料は、残念ながら今のところみつかっていないんだ。ただ、とちゅうで見沼の低地と荒川(このころは入間川)を渡る必要があることや、戦国時代の道などを考えると、見沼区をとって大宮区に入り、中央区から桜区をとる道すじが一番可能性が高いんじゃないかな。秀吉は、行きにはさいたま市の東側を縦断^{じゅうたん}し、帰りには市のまんなかあたりをななめに横断^{おうたん}したんだね。430年前に秀吉は、みちすがら、さいたまのどんな風景を目にしたんだろうなあ。

「天下人・秀吉がやってきた」は、ひとまずここまで。今日は、天下統一を完成させるその時に、秀吉がさいたまに来たっていうことは、すごいことだなあ、って思って、それを少しくわしくみんなに紹介したんだけど、時代の激動を勝ち抜いた人たちにスポットをあてたお話だったね。でも、秀吉がリードした、あらたな時代の幕開けのかけには、そこで敗れ去っていった人たちがたくさんいたんだ。さいたまの道^{いぎょうよう}を意気揚々とおりぬける秀吉を見送るのは、秀吉の威光^{いこう}にひれふす人ばかりではなかったんだと思うよ。でも、それまで築いてきたことをすべて失っても、失意から立ち上がり、新しい時代の中をたくましく生き抜いた人たちがたくさんいたんだ、っていうことも想像してみてほしいなあ。

それから、今日紹介した道をはじめ、さいたまには重要な道がいくつもあり、時代とともに移り変わったりもしているんだ。これからのみんなへの挑戦でも問題にするかもしれないから、楽しみにしていてね！

それでは、おしまい！ ちんちようちんちよう。

※この「天下人・秀吉がやってきた」は、いろんな文献を勉強してまとめたんだけど、特に次の文献からたくさんのお話を教えてもらったんだよ。専門論文や史料集もあって、難しいかもしれないけど、興味をもって調べるときには、参考にしなね。

●をつけた本はさいたま市図書館にあるものだよ（令和2年7月9日蔵書検索）。どの図書館にあるのかは、さいたま市図書館のホームページの「資料をさがす」で調べてみてね。

●盛本昌広さん『松平家忠日記』（角川選書） 角川書店 1999年

○横浜市歴史博物館（編）『特別展 秀吉襲来 ー近世関東の幕開けー』
同館 1999年

○江田郁夫さん「豊臣秀吉が宇都宮で過ごした十一日間」
橋本澄朗・千田孝明さん編『知られざる下野の中世』随想舎 2005年

○竹井英文さん「豊臣政権と武蔵府中 ー府中御殿の再検討ー」
『府中市郷土の森博物館紀要』第26号 府中市郷土の森博物館 2013年

●藤井譲治さん（編）『織豊期主要人物居所集成〔第2版〕』 思文閣出版 2016年

○府中市郷土の森博物館（編）『徳川御殿 @府中』ブックレット19 同館 2018年

○名古屋市博物館（編）『豊臣秀吉文書集 四 天正十七年～天正十八年』
吉川弘文館 2018年